

6月26日 サグリ株式会社 創業者 代表取締役 CEO 坪井 俊輔氏

学んだこと、印象に残った言葉、講師へのメッセージ

本日は貴重なご講演をいただきありがとうございました。

講義を通じて、特に印象に残っている点が2つある。1つ目は、社会課題に情熱をもって向き合っている姿勢。2つ目は、インパクトスタートアップの実践と可能性である。

まず、「なぜ社会課題を解決したいのか」という問いに対して、坪井さんが「知ってしまった以上、自分がやらなくてはと思った」「問題解決は、自分の欲求を越えており、最もやる気を感じるから」とおっしゃっていて、強く印象に残っている。夢を持たない中高生と出会い、ただ夢を見せるだけでは意味がないと感じた経験。それを経て、自分の得意な宇宙やAIの分野を軸に、農業という未知の領域に飛び込んでいく決意。その背景には、誰かがやらなければ変わらないという、強い使命感があったように思う。にもかかわらず、講義全体を通して終始明るく、夢を語る姿が印象的だった。「バカなことをしていただけ、すごく楽しかった」「夢を見るのが得意だった」という言葉の裏には、社会課題の厳しさと真剣に向き合いながらも、前を向き続ける強さがにじんでいた。そのギャップに大きな魅力を感じた。

私自身、幼い頃から夢と現実のギャップに悩みながら、それでも身近な人のために何かをしたいという思いを持ち続けてきた。坪井さんの「夢を見せるだけでは足りない」「本当の貧困層には支援が届いていない」という言葉には、どこか自分自身の問い直しにもつながるような感覚があった。自分と生い立ちが少し重なる部分もあり、勝手ながら強い親近感と刺激を受けた講義だった。

次に、課題解決を継続的に実現するために、技術と仕組みの力をどう活用しているかという点に、大きな学びがあった。農業の経験がない中で、宇宙関連の提携を通じて地域に入り、衛星データとAIを活用した「ニナタバ」というサービスを展開。農地状況を可視化し、地形や農家の意向から土地の最適化を提案する仕組みには驚かされた。さらに、土壌の成分分析や肥料削減によるカーボンクレジットの活用など、ただ技術を導入するだけでなく、現場の課題と国の制度をつなぐ発想に、スタートアップの可能性を感じた。「今までは行政がやるのが当たり前だった。でもこれからは民間と一緒にやっていきたい」という言葉も、未来の地域や社会の姿を前向きに描いているように思えた。

本日の講義を通じて、「自分がやるべきだと思ったからやる」という使命感の力と、「社会課題に夢とユーモアで立ち向かう」姿勢の両立に、大きな勇気をもたらした。そして、自分の過去の経験や関心もまた、社会の役に立つかもしれないという希望につながった。自分にできることを問い続け、行動に変えていく覚悟を少しずつ持ち始めたいと思う。本日は改めて、深い学びと前向きな刺激を与えてくださりありがとうございました。(経営学部2年)

私は地方行政の立場から社会課題の解決に取り組みたいと考えているので、今回の講義は非常に楽しみにしていたのですが、お話を聞いて社会課題の解決に民間セクターの立場から熱意をもって取り組んでおられることや、実際にうちゅうやサグリの事業を通して影響を与えているのがとても素敵だと感じ、また自分ももっと目標に向かって努力していきたいと思いました。

そしてサグリの事業のお話では、まず農地の調査を目視でやっていてしかもほとんど調査できていないということを知らず、非常に驚きました。これを人工衛星を用いてできたり、さらには土壌の調査もできたりするというのは魅力的で、これからさらにできることが増えるのではと期待が高まりました。地方行政などについて学んでいく中で、農業については気がかりなところが多かったので今回お話を聞くことができて非常に良かったです。

またウクライナに行くときに遺書を書いたが、その時に自分はもういつ死んでも悔いはないと感じたとおっしゃっていたのが印象的で、それだけ熱量をもってこれまで様々なことをやってこられたのだと感じ、自分も同じように悔いはないと言い切れるくらい自分の目標に熱量をもって取り組んでいきたいと強く思いました。貴重なお時間を頂きましてありがとうございました。(都市科学部1年)

学生の頃にベンチャー企業を起業し、大学卒業後にスタートアップ企業を起業したと聞いて、既に二種類の企業を起業していることに驚きました。起業において坪井さんが大事にしていることが熱と志だと聞いて、やはり起業家には情熱と高い志が必要なのだと感じました。ソフトバンクの孫社長も、志高くという言葉をおっしゃっているので、起業家にかかわらず、自分の夢を実現したいなら強い志をもつことが必要不可欠なのだと実感しました。講演の途中でバスケットボールの動画を見た後に、坪井さんから黒いクマがムーンウォークをしていたということに気づいたかと問われ、最初何のことかと思いました。しかし、後から考えたら白グループのバスを集中して見ようとしているときに、やたら白グループの人たちに被る黒い人がいるなど感じていたことを思い出して、本当に視界に入っているのに見えなくなっていたのだと気づいて衝撃を受けました。だからこそ、人は見ようとするものしか見えないものなのだという言葉に説得力を感じました。あと、坪井さんが小さいころからディズニーリゾートが大好きだったということを知って、とても共感できました。私も、一時期ディズニーリゾートが好きすぎて、オリエンタルランドに就職しようと思面目に考えていました。私の場合、一瞬で熱が冷めてしまったのですが、この熱量をずっと持ち続けられる人は小さいころの夢を実現できるのだろうなと思いました。中高生の多くが小学生の頃に持っていた夢を失ってしまうという問題を解決したいとおっしゃっていて、そういえば私も高校2年生のときに医者になりたいという夢を諦めて以来、

はっきりと言葉にできる夢がないということに気が付きました。今の自分に大きな不満や不安は感じないのですが、自分が大学生のうちに何をすべきなのかわかっていない状態なので、そのうちどうしようもなく不安になってくるのかもしれないと思うと、今から将来の選択の幅を広げる努力を始めたほうがよいと感じました。(経営学部1年)